慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 魯・斉関係における婚姻と夫人 |
| Sub Title | The Political Function of Marriage on the Relationship between Lu (魯) and Qi (斉) in the Spring and Autumn Period |
| Author | 吉田, 章人(Yoshida, Akihito) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 2009 |
| Jtitle | 史学 (The historical science). Vol.78, No.3 (2009. 10) ,p.35(263)- 72(300) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 論文 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20091000-0035 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 魯・斉関係における婚姻と夫人

吉田章人

## はじめに

春秋時代の魯にとって斉は隣の大国であり、春秋時代を通じて会盟・朝聘・婚姻・戦争と魯に大きな影響を及ぼしていた国である。[1] なかでも魯・斉の関係を見ていくとき、まず目につくのは両国の間で繰り返し結ばれた通婚関係である。

中国古代の婚姻に関してはこれまで多くの研究が存在するが、近年の春秋史研究を見ると、婚姻における諸侯国間の現実の政治上の力関係や利害関係を意識した研究が進められている。[2]

『左伝』を見る限り、魯は桓公から成公まで六人の夫人を斉から迎えている。魯侯がほぼ連続して斉から夫人を迎えていることは魯・斉の婚姻の大きな特徴として挙げられる。『左伝』哀公二四年に「周公と武公とは薛に娶り、孝恵は商に娶り、桓より以下は斉に娶れり。此の礼や則ち有り」とあるように、魯では桓公以来、斉から夫人を迎えることが「礼」と考えられている。こうした婚姻形態は表面的には母方クロスカズン婚と呼ばれるものであるが、齋藤道子氏は、こうした連続婚が母方クロスカズン婚の原理に則ったものであることは認めつつも、実際には複数の姓の女性との間に婚姻関係が結ばれており、正確にはクロスカズン婚ではなくなりつつあると指摘している。[3] また、小林伸二氏は他国の通婚関係において、特定国との恒常的な婚姻は一般的なものとは言えず、魯の恒常的な斉との通婚関係は『春秋』『左伝』を見る限り突出していたと指摘する。[4] さらに、吉本道雅氏は、魯は春秋中期頃まで諸侯が通婚相手を特定の諸侯国に限

定する婚姻規制を遵守しており、その要因を斉との政治的関係の安定的維持への顧慮が作用していたためと述べている。(5)

このように魯・斉間の婚姻は一見慣習的ではあるが、実際には異姓の婦人が介在するため、必ずしも特定の姓から迎えた夫人の子が即位するとは限らず、しかもこのような恒常的な連続婚は春秋時代において比較的特殊な事例に属するものであった。

こうした魯・斉間の婚姻の背景には当然、両国の政治的思惑が含まれていると思われるが、それだけに留まらず、魯侯夫人がしばしば斉侯と会合をしたり、魯侯の殺害に関与するなど極めて政治的な行動を見せていることがある。特に、桓公夫人文姜は夫桓公の殺害に関与し、さらに兄である斉襄公と密通していたとされ、一際目を引く女性である。そのため彼女に関する研究は少なからずあり(6)、文姜の行動は極めて政治的なものであったと指摘されている。しかしながら、文姜の活発な活動は他の魯侯夫人に比して突出したものであり、彼女が何故このような活発な外交活動が可能であったのかという点については十分な考察がなされていない。従来、中国古代の女性は低い地位に置かれていたと考えられていたが、近年では出土史料などの検討から従来考えられていたよりも比較的高かったとする説が出されている(7)。夫人の政治的地位・役割がどの程度のものであり、またどのように変化していったかという点にも考察の余地があるように思われる。

筆者は拙稿「魯の三桓氏の世族化と権力掌握について」（以下、前稿(8)）において、春秋時代の代表的世族である魯の三桓氏（季孫氏・叔孫氏・仲孫氏）が権力を掌握していく過程について検討した。その中で、魯における公室政治(9)から世族政治への移行と対外政策における斉から晋への比重の移行とが、ともに成公期になって顕著になっていく現象であることを指摘した。こうした二つの動きは相互に無関係ではないように思われ、斉との通婚が成公夫人斉姜を最後に見られなくなるのはこうした状況を示唆的に表したものと言えよう。前稿では、魯の外交担当者の出自に注目して、春秋時代を以下の三つの時期に分けた。

・僖公期までは公や公の夫人や公子・公孫を中心とする公室によって外交活動が行われており、公室外の勢力はほとんど見られない。―第一期―

・文公・宣公期においても、依然として公子・公孫が外交活動の中心にあったが、その一方で三桓氏をはじめとする公室外の勢力も目立ってくるようになる。―第二期―

・成公期以降の外交活動では、公子・公孫がほとんど見られなくなり、三桓氏を中心とする世族によって行われるようになる。―第三期―

これに基づいて、魯侯夫人をその婚姻時期によって分けると桓公夫人文姜・荘公夫人哀姜・僖公夫人声姜は第一期に、文公夫人出姜・宣公夫人穆姜は第二期、成公夫人斉姜は第三期に当てはまる。但し、穆姜については実際に活動が見えるのは第三期である。本稿でもこの三つの時期区分に基づいて、魯・斉間の婚姻と夫人の動向について検討していくことにする。

以上を踏まえて、本稿では魯・斉の婚姻を通時的に見ていくことによって、婚姻の政治的機能とその変化を明らかにし、また魯侯夫人の動向を確認しつつ、魯国政治史におけるその役割と意義について考えていく。

尚、本稿において用いる史料は特に断らない限り『左伝』によるものとする。また、魯の君主については「〇公」と表記し、それ以外の国の君主については「国名＋〇公」を原則とする。但し、同一文中などどこの国の君主か自明と思われる場合は国名を省略する。

## 1．魯・斉の力関係について

本章ではまず春秋時代における魯と斉の力関係について確認しておきたい。春秋時代における諸侯国間の主な外交手段は、平時には会盟と朝聘（遣使）とがあり、戦時には当然戦争である。但し、会盟については多国間のものも多く、必ずしも魯・斉が主体的な立場にあるとは限らないため、ここでは魯・斉間の遣使と交戦についてそれぞれ注目してみたい。

〔表1〕は『春秋』及び『左伝』をもとに、魯・斉両国間の遣使と交戦の事例を確認し、その総数をそれぞれ表したものである。〔表1〕から春秋時代における魯・斉の両国の関係の推移を見ると、まず魯・斉間の遣使のうち、約七割が魯から斉への遣使であり、また魯侯が直接斉に赴いた事例に比べて、斉侯が魯に赴いた事例が圧倒的に少ないことがわかる。一方、魯・斉間の交戦を見ると、遣使の場合とは異なり、八割以上が斉から魯に出兵したものであり、この場合は斉が主体的に動いている。

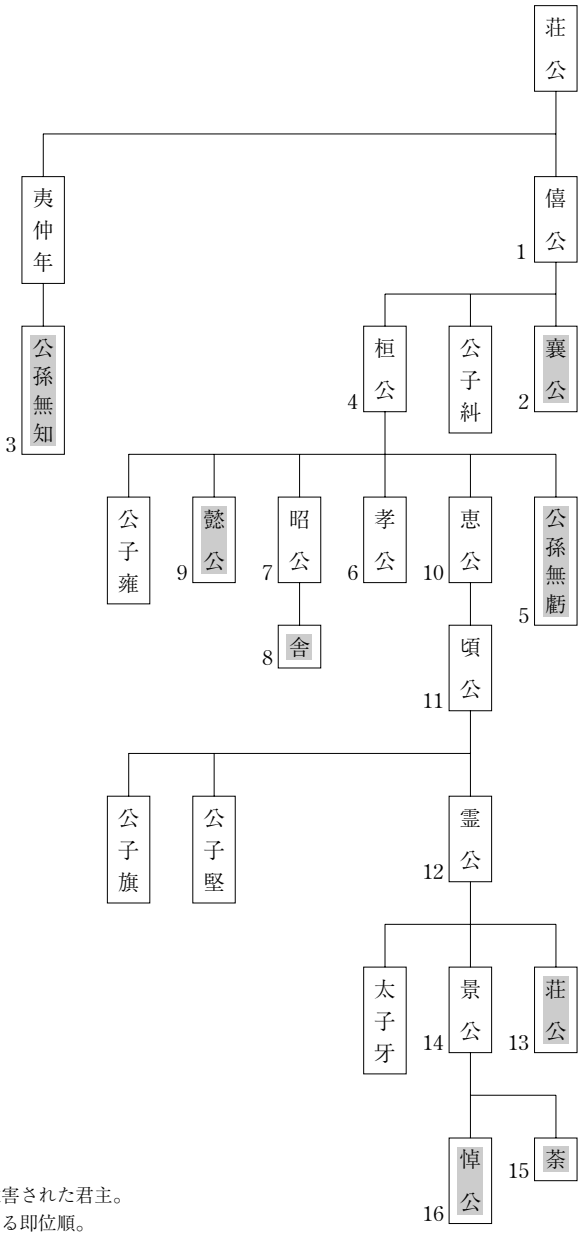
〔表１〕　魯・斉外交対照表

| 遣使 | | | | 交戦 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 魯 | 斉 | 計 | 魯侯(在位年数) | 魯 | 斉 | 計 |
| 0 | 2 | 2 | 隠公 722-712(11年) | 0 | 0 | 0 |
| 2(1) | 1 | 3 | 桓公 711-694(18年) | 0 | 1 | 1 |
| 6(3) | 3(2) | 9 | 荘公 693-662(32年) | 1 | 1 | 2 |
| 0 | 2 | 2 | 閔公 661-660(２年) | 0 | 0 | 0 |
| 7(3) | 2(1) | 9 | 僖公 659-627(33年) | 1 | 2 | 3 |
| 6 | 2 | 8 | 文公 626-609(18年) | 0 | 3 | 3 |
| 12(5) | 3 | 15 | 宣公 608-591(18年) | 0 | 0 | 0 |
| 2 | 0 | 2 | 成公 590-573(18年) | 0 | 1 | 1 |
| 2 | 1 | 3 | 襄公 572-542(31年) | 1 | 8 | 9 |
| 2 | 0 | 2 | 昭公 541-510(32年) | 0 | 2 | 2 |
| 1 | 1 | 2 | 定公 509-495(15年) | 2 | 2 | 4 |
| 3 | 2 | 5 | 哀公 494-468(27年) | 0 | 2 | 2 |
| 43(12) | 19(3) | 62 | 計 | 5 | 22 | 27 |

※(　)内は君主が赴いた回数

さらに、斉の対魯外交も考慮に入れておきたい。〔表２〕は斉侯を基準として〔表１〕を再構成したものである。注目すべきは、孝公（前六四二～前六三三）・懿公（前六一二～前六〇九）の時代が在位期間に比して交戦の回数が多いのに対して、その前後の昭公（前六三二～前六一三）・恵公（前六〇八～前五九九）の時代には魯との交戦は見られず、遣使が比較的頻繁なことである。つまり、孝公・懿公の時代は魯との関係が緊張状態にあったのに対して、昭公・恵公の時代は友好関係を維持しており、国君ごとに斉の対魯政策が大きく変化している。『左伝』によれば、桓公の死後、桓公の六公子が公位をめぐって争いを起こしているが（僖公一七年・一八年）、この四人の斉侯はいずれも桓公の子であり（〔図１〕参照）、公位をめぐる対立が三〇年以上もくすぶり続けたことを示している。〔表２〕で見られる孝公・昭公・懿公・恵公の対魯政策の変化は、当然当時の国際状況を考慮する必要があるが、こうした桓公公子間の対立という状況をある程度反映したものと言えよう。また、『左伝』に見られる斉侯一八人中九人が殺害されている。しかも、斉での君主殺害は春秋後期に至るまで見られ、桓公や景公を除けば、春秋時代を通じて斉侯の地位は比較

〔図1〕斉侯系図




※網掛けのある人物は殺害された君主。
※番号は『左伝』における即位順。

〔表２〕　魯・斉外交対照表（斉侯基準）

| 遣使 | | | | 交戦 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 魯 | 斉 | 計 | 斉侯(在位年数) | 魯 | 斉 | 計 |
| 1 | 3 | 4 | 僖公 722-698(25年) | 0 | 0 | 0 |
| 2(1) | 1(1) | 3 | 襄公 697-686(12年) | 0 | 1 | 1 |
| 10(5) | 5(2) | 15 | 桓公 685-643(43年) | 1 | 1 | 2 |
| 0 | 0 | 0 | 孝公 642-633(10年) | 1 | 2 | 3 |
| 5(1) | 2 | 7 | 昭公 632-613(20年) | 0 | 0 | 0 |
| 3 | 1 | 4 | 懿公 612-609(４年) | 0 | 3 | 3 |
| 12(5) | 3 | 15 | 恵公 608-599(10年) | 0 | 0 | 0 |
| 0 | 0 | 0 | 頃公 598-582(17年) | 0 | 1 | 1 |
| 3 | 0 | 3 | 霊公 581-554(28年) | 0 | 6 | 6 |
| 1 | 0 | 1 | 荘公 553-548(６年) | 1 | 1 | 2 |
| 4 | 2 | 6 | 景公 547-490(58年) | 2 | 5 | 7 |
| 0 | 0 | 0 | 晏孺子荼 489(１年) | 0 | 0 | 0 |
| 1 | 1 | 2 | 悼公 488-485(４年) | 0 | 1 | 1 |
| 0 | 0 | 0 | 簡公 484-481(４年) | 0 | 1 | 1 |
| 1 | 1 | 2 | 平公 480-468(13年) | 0 | 0 | 0 |
| 43(12) | 19(3) | 62 | 計 | 5 | 22 | 27 |

※(　)内は君主が赴いた回数
※斉侯の在位年数は『史記』十二諸侯表による
※僖公・平公に関しては『左伝』記事の範囲内に限る

的不安定なものであったと言える。(10)

以上に見てきたように、魯・斉間の力関係は春秋時代を通じて斉がほぼ一貫して優位な立場にあり、魯が斉の動向に影響を受けやすい状況にあったことが確認できよう。しかも、斉では君主殺害や公位をめぐる争いによる政権交代も多く、このような斉の不安定さは魯においても決して無関係なものではなかったと思われる。齋藤氏によれば、春秋時代における諸侯国間の婚姻は、強国は自国の娘を他国へ連続的に送ることで、自国の影響力を相手国に及ぼすことを、一方、さほど強力でない国は強国の女性を夫人として迎え、強国を自らの「婚」とすることによって、国際的に自国の立場の強化をそれぞれ意図したものであった。すなわち、婚姻においては当事者間の力関係が大きな影響を及ぼしており、しかもそれは強国・弱小国が相互に自国に有利な状況を得ようとする意図が背景にあったと

考えられている。[11] しかしながら、齋藤氏自身も指摘しておられるように、こうした婚姻の持つ政治的機能は春秋時代以前の原理に基づいたものであり、このような機能は春秋時代という大きな変革期においては希薄化を余儀なくされたと思われる。では、当事国間のこのような政治的思惑に対して、婚姻は実際にどの程度機能していたのだろうか。

このような両国の関係や春秋時代の社会状況をふまえて、個々の婚姻の成立状況や魯侯夫人の動向を確認しつつ、両国の関係性の変化や魯における政治体制の変化が婚姻や魯侯夫人にどのような影響を及ぼしたかを見ていくことにしたい。

## 2. 魯・斉婚姻の始まりと文姜の外交活動
### ―第一期①―

〔表3〕は魯侯夫人の入嫁年・没年、夫人を迎える際の担当者、さらに婚姻時及び婚姻後の斉侯の変遷を示したものである。本章以降、魯・斉の婚姻が結ばれたそれぞれの事情や婚姻後の両国の関係を確認し、特に魯侯夫人の動向に注目しながら、婚姻が両国に及ぼした影響について検討する。まず本章では、魯が斉から夫人を迎えるようになった背景と桓公夫人文姜の動向について見ていくことにする。

### 1）魯・斉婚姻の始まり

桓公夫人文姜が魯に嫁いだのは桓公三年である。魯はこの婚姻以降、ほぼ連続的に斉から夫人を迎えるようになるが、これ以前に魯が斉から夫人を迎えた例は見られない。『左伝』によれば、孝公・恵公は宋から夫人を迎えており、隠公・桓公の母もともに宋出身の女性とされる。つまり、魯はこの婚姻を機に夫人を迎える相手を宋から斉に転換したことになる。

当時の魯・宋関係は、『左伝』によれば、恵公（隠公・桓公の父）の末年、宋の侵攻があったが、隠公元年に両国は宿の盟で講和している。さらに、隠公三年に宋穆公が死去すると、翌隠公四年、隠公は宋殤公と宿の盟を温めようとしたことが確認できる。隠公は恵公の太子であった異母弟桓公が幼少であったために即位したとされており、その政権は不安定な部分があった。[12] こうした事情から隠公は母方の実家である宋の後ろ盾を求めたと見なすことができよう。ところが、『左伝』隠公五年には鄭から攻められた宋が魯に救援を求めた際に、隠公が

〔表３〕　魯・斉婚姻表

| 夫人 | 魯侯 | 婚姻担当者(魯) | 婚姻担当者(斉) | 斉侯 | 入嫁年 | 没年 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 文姜 | 桓公 | 公子翬「逆女」 | 僖公「送讙」※<br>夷仲年「来聘」 | 僖公→襄公→桓公 | 桓公３年 | 荘公21年 |
| 哀姜 | 荘公 | 荘公「納幣」(荘22)※<br>荘公「逆女」(荘24) | ？ | 桓公 | 荘公24年 | 閔公２年 |
| 声姜 | 僖公 | ？ | ？ | 桓公→孝公→昭公<br>→懿公 | ？ | 文公16年 |
| 出姜 | 文公 | 公子遂「納幣」(文2)<br>？「逆女」(文4)※ | ？ | 昭公→懿公→恵公 | 文公４年 | 文公18年 |
| 穆姜 | 宣公 | 公子遂「逆女」 | ？ | 恵公→頃公→霊公 | 宣公元年 | 襄公９年 |
| 斉姜 | 成公 | 叔孫僑如「逆女」 | ？ | 霊公 | 成公14年 | 襄公２年 |

出姜の没年は死亡ではなく、斉に帰国。
※は『左伝』が「非礼」とするもの。但し、哀姜の「納幣」(荘22)については杜注による。



宋の対応に立腹して救援しなかったとする記事があり、「宋、邾に入るの役を以て〔隠〕公を怨み、命を告げず。〔隠〕公怒り、宋の使ひを絶つ」（隠公九年）と、これ以降両国の関係が悪化したことを示唆している[13]。また、魯は隠公六年に鄭・斉と講和しているが、宋は隠公五年に鄭に侵攻し、翌年鄭の長葛を占領しており、両国の外交政策には違いが見られる。これに対して、斉は中原で勢力を拡大しつつあり[14]、魯も隠公六年に艾の盟を結んで以降、斉との友好関係を築いてきた。こうした流れは隠公が殺害され桓公が即位してからも踏襲されており[15]、魯・斉間の婚姻は魯の対外政策の転換に伴うものであったと思われる。

この文姜との通婚を担当した公子翬は隠公を殺害して桓公を擁立した人物であり、当時の対斉協調路線を進めた人物であったとされる[16]。一方、ここで注目すべきは、斉僖公自ら魯の讙まで文姜を送ってきたことである。このことについて、『左伝』は「非礼」であるとしている[17]。この『左伝』の批判が妥当であるかどうかはともかく、〔表３〕に見られるように、魯・斉の婚姻において斉侯自身が公女を送ってくることはこの記事以外にはなく、『左伝』を見る限り斉侯が魯に赴くこと自体も少ないこ

とを考えると、この婚姻が斉にとっても重要な意味を持っていたと思われる。

この当時、斉は鄭の公子忽（後の昭公）にも公女を嫁がせようとしている。『左伝』は斉との婚姻を断った公子忽に対して、鄭の祭仲が「必ず之を取れ。君内寵多く、子大援無し。将に立つことを得ざらんとす。三公子は皆君なり」（桓公一一年）と、斉との婚姻が、公子忽が公位につくための大きな後ろ盾になると述べている。こうした他国からの援助を『左伝』はまた「外援」という言葉で表しているが[18]、これを斉の側から理解すると、公女を君主や公子に嫁がせることによってその人物の後ろ盾として相手国に影響力を及ぼすことが可能であったと言い換えられよう。この婚姻は実際には成立していないものの、ここに見られる斉と公子忽に関する記事は齋藤氏が指摘した婚姻の政治的機能を示していると言える。この時期の諸侯国同士の関係は諸侯間の人格的な関係によって維持されたと考えられており[19]、婚姻によって当事者間に強い結びつきを作り出すことが期待されたと思われる。

このように考えると、斉侯自ら公女を送ってきたことは、この婚姻が当時の斉の勢力拡大において非常に重要な政策であったことを物語ると言えよう。しかしながら、この婚姻後、魯・斉関係はむしろ悪化する。その大きな要因となったのは紀国をめぐる問題であった。当時の魯の外交の重要な柱の一つは紀との関係であったと考えられ[20]、紀は魯から夫人を迎えており、魯・紀もまた姻戚関係にあった。紀が斉に併合された後、魯に対する斉の優位が確定的になっていく状況を考慮すると、魯にとって斉の勢力拡大に対抗していく上で、紀との関係は極めて重要であったと思われる。魯は婚姻によって斉との友好を図る一方で、紀との婚姻関係によって斉の勢力拡大を牽制したと見なすことができよう。その紀を併合しようとする斉に対して、紀から保護を求められた桓公は斉に対抗する立場をとる[21]。つまり、短期的に見ればこの婚姻は魯・斉関係にとって有効に作用しなかったと言える。ところが、その後桓公の対外政策はことごとく不調に終わり、斉との妥協を余儀なくされ、文姜とともに斉に赴いた桓公は斉で殺害される。この桓公殺害については次節で改めて考察することにしたい。

### 2）文姜の外交活動

では、文姜の動向について見ていくことにしたい。

〔表４〕　魯侯夫人外交活動表

| | | 夫人 | 表記 | 対象国 | 斉侯 | 経文 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 桓公18年 | 文姜（桓公） | 如 | 斉 | 襄公 | 公与夫人姜氏遂如斉。 | 『左伝』「斉侯通焉。公謫之。以告。」 |
| 2 | 荘公元年 | 文姜 | 孫＊ | 斉 | 襄公 | 夫人孫于斉。 | |
| 3 | 荘公２年 | 文姜 | 会 | 斉 | 襄公 | 夫人姜氏会斉侯于禚。 | 『左伝』「書姦也。」 |
| 4 | 荘公４年 | 文姜 | 享 | 斉 | 襄公 | 夫人姜氏享斉侯于祝丘。 | 『会箋』「書姦也。」 |
| 5 | 荘公５年 | 文姜 | 如 | 斉 | 襄公 | 夏、夫人姜氏如斉師。 | 杜注「書姦。」 |
| 6 | 荘公７年 | 文姜 | 会 | 斉 | 襄公 | 夫人姜氏会斉侯于防。 | 『左伝』「斉志也。」 |
| 7 | 荘公７年 | 文姜 | 会 | 斉 | 襄公 | 夫人姜氏会斉侯于穀。 | |
| 8 | 荘公15年 | 文姜 | 如 | 斉 | 桓公 | 夏、夫人姜氏如斉。 | |
| 9 | 荘公19年 | 文姜 | 如 | 莒 | 桓公 | 夫人姜氏如莒。 | 杜注「非父母国而往、書姦。」 |
| 10 | 荘公20年 | 文姜 | 如 | 莒 | 桓公 | 夫人姜氏如莒。 | |
| 11 | 閔公２年 | 哀姜 | 遜＊ | 邾 | 桓公 | 夫人姜氏遜于邾。 | |
| 12 | 僖公11年 | 声姜（僖公） | 会 | 斉 | 桓公 | 公及夫人姜氏会斉侯於陽穀。 | 『杜注』「非礼也。」<br>『会箋』「斉桓公女。其娶不見経。蓋公為公子時聘之也。」 |
| 13 | 僖公17年 | 声姜 | 会 | 斉 | 桓公 | 夫人姜氏会斉侯于卞。 | |
| 14 | 文公９年 | 出姜 | 如 | 斉 | 昭公 | 夫人姜氏如斉。 | 杜注「帰寧也。」 |
| 15 | 文公18年 | 出姜 | 帰＊ | 斉 | 恵公 | 夫人姜氏帰于斉。 | 『左伝』「大帰也。」<br>『会箋』「大帰者謂帰而不復来也。」 |

（　）内は同行者。
＊は出奔もしくは帰国であり、外交活動ではない。



〔表４〕は『春秋』『左伝』に見える魯侯夫人の外交活動を表にしたものである。魯侯夫人が国外に出た事例は一五例あるが、内一二例が夫人の外交活動と言える。その中で文姜の外交活動は九例と実に七五％を占めている。そのため文姜については先行研究においても多く論じられているので[22]、本稿では極力重複を避けることにしたい。文姜が嫁いだ桓公三年から死去する荘公二一年までを魯・斉関係に基づいて見ていくと大きく三つの時期に分けることが可能であろう。すなわち、①桓公三年～一八年②荘公元年～九年③荘公一〇年～二一年（文姜死去）である。

第一時期は、魯・斉の婚姻が成立し、文姜が魯に嫁いでから斉によって夫桓公が殺害されるまでである。第二時期では、斉で桓公が殺害され、文姜の子荘公が即位する。文姜は斉襄公との会合を繰り返し、その動向は『左伝』において批判されている[23]。第三時期では、斉襄公が殺害されると、魯は公子糾を擁して斉に出兵したが、先に莒から桓公（公子小白）が斉に入り魯

の目論見は失敗に終わる。その後、斉は桓公のもとで勢力を拡大し、中原における覇権を確立する。

文姜は魯・斉間の外交活動で活躍する女性であるが、第一時期には政治的な動きはほとんど見られない。〔表4〕でもわかるように、文姜が外交の場に初めて登場するのは桓公一八年であり、その主な活躍は桓公期ではなく、荘公期に集中している。その要因として婚姻後の魯・斉関係の変化が挙げられる。前述したように、桓公期の魯は紀国をめぐる対応などの諸問題から斉と対立しており、魯・斉の交流自体が少なくなったため、文姜の活躍する機会がなかったと思われる。しかしながら、桓公の対外政策が不調に終わると、魯は斉との妥協を余儀なくされ、ここにおいて文姜は桓公とともに斉に赴くことになる。ここで文姜が同行していることは、桓公にとっては文姜に斉との橋渡し役を期待していたと思われるが、桓公は斉において殺害される。『左伝』は斉による桓公殺害の理由を文姜と兄である斉襄公との密通が桓公に知られたためとするが、実際は紀の問題などによる魯・斉の対立が原因であったと考えられる。(24)

この桓公殺害に関与したとされる文姜は一時斉に逃れているが、第二時期になると、文姜は魯に帰国したらしく、文姜と斉襄公との会合が『春秋』『左伝』にしばしば見られている。こうした文姜の活動について『左伝』は「書姦（姦を書す）」（荘公二年）と解し批判的に捉えているが、当時の情勢から魯・斉間のパイプ役として一貫して機能していたことは先行研究のすでに指摘するところである。(25) この桓公殺害に文姜が関与していたとすれば、文姜が桓公とともに斉に赴いたことは斉の意向によるものであったと考えられる。(26) すなわち、文姜は斉の意向に沿って、桓公とともに斉に赴き、桓公殺害へと導いたと思われる。鈴木裕子氏は、文姜が桓公の殺害に関与しつつもその地位を保ち続けたことについて、文姜の行動が実家である斉の意向に沿ったものであったためと指摘している。(27) さらに、ここで一旦は斉に逃れたとされる文姜が魯に帰国していること、その後、文姜が魯・斉外交で活躍していることは、荘公の即位に際しても、斉の意向が強く働いていたことを推測させる。後述するが、荘公の死去した際、公位をめぐって荘公の公子と荘公の異母兄弟公子慶父が争っていることを見る限り、荘公の即位は必ずしも規定路線であったわけではなく、(28) 斉の後ろ盾によるところが大きかったと思われる。斉は文姜を介して斉にとって好ましくない桓公を殺害し、文姜の子

を即位させたといえる。ここに婚姻関係に基づく斉の魯に対する政治的介入を見ることができる。つまり、文姜の一連の行動は斉の意向に沿ったものであり、斉は文姜を通して、魯に強い影響力を及ぼすことができたのである。

　荘公即位後の魯は斉との友好関係を回復しつつあったが、荘公八年に斉襄公が殺害され、斉で公位をめぐる争いが起こると、翌荘公九年、魯は公子糾を擁立しようと斉に出兵する。しかし、一歩早く莒から桓公（公子小白）が斉に入り、魯の計画は失敗に終わる。これ以降、斉は桓公によって中原における覇権を確立する[29]。『史記』斉太公世家によれば、公子糾の母は魯女とされており、魯は公子糾を斉侯に立てることにより、斉への影響力を行使しようと図ったものと考えられる。一方、莒は斉襄公の時代に斉桓公が逃れていた国であり、桓公の即位を援助したと考えられているが、斉桓公の母は衛姫であり[30]、莒との直接的な血縁関係は史料上確認できない。この斉桓公が莒に援助を求めたことは莒の勢力と地の利によるところが大きいと考えられる[31]。これまで見てきた事例は通婚が当事国の対外政策にいかに機能してきたかを見てきたが、この斉桓公のケースは、血縁関係や婚姻によらない政治的関係が機能していく状況を見ることができよう[32]。

　第三時期にも第二時期に比べて少なくなっているものの、文姜は斉に荘公一五年、莒に荘公一九年・二〇年と赴いており、依然として政治的影響力を維持し続けたと見られる。文姜が斉に赴いた件については、『左伝』が斉桓公を覇者と認定する鄄の会の直後であり、会箋は「始めて覇たるを賀すなり」と解しているが、魯がその会合に参加しなかったことに対する釈明の意味合いも含まれていたと思われる。さらに、この時期において注目されるのは、文姜が莒に二度も赴いていることである。〔表4〕でわかるように、魯侯夫人が魯から国外に出る場合、この二例と出奔のケースを除けば、その行き先は斉に限定される[33]。このことは外交における夫人の役割が魯・斉関係のパイプ役であったことを意味し、魯侯夫人が実家以外の国に赴くことは極めて特異なケースと言える。杜注は、文姜が莒に赴いたことについても「書姦」と解するが、こうした解釈はこれまでに述べてきたように首肯しがたい。文姜の「如莒（莒に如く）」についてもやはり魯・斉外交との関連を考えるべきだろう。

　第三時期における文姜の外交活動について、鈴木氏は

文姜が斉桓公との関係を保つ一方で、斉襄公の後継者をめぐって対立関係となった莒と友好関係を結ぶ役割を果たしたのではないか[34]、と述べている。一方、小林氏は斉桓公に対して潜在的に影響力を保持していた莒を通して、間接的に桓公に圧力を加えようとしたものであり、また文姜の対莒外交は荘公の意図する魯・斉講和の流れに反する行動であったとする[35]。両氏の見解はともに文姜の「如莒」が魯・斉外交の一環であった点では共通しているが、文姜の行動が魯・斉どちらの立場に立ったものであったかという点で意見を異にしている。

では、第三時期における文姜の動向はどのような意図によって行われていたと言えるだろうか。この時期の荘公の動向と比較して考えてみることにしたい。

荘公期の魯・斉関係を見ていくと、公子糾擁立に失敗してから文姜の死までの間、荘公自身は柯の盟を除いて、斉との交渉を持っていない。第三時期における魯の外交活動は全体的に停滞した感があるが、その中でも文姜の三例が最も多く、魯の対外政策の主導権は文姜が握っていたと思われる。またこの時期、荘公の動きがあまり見られないことは文姜の行動を容認していたと思われる。一方、荘公二一年に文姜が死去すると、翌荘公二二年、荘公は斉に赴いて「納幣（幣を納る）」を行い婚約を成立させ、荘公二三年には三度にわたって斉侯と会っている。このように、文姜の死後、荘公の外交活動は活発化している。文姜の生存中には文姜の外交活動に比して、荘公は積極的な活動を見せていないのに対して、文姜の死後には荘公自身が斉の召集する会盟・出兵に参加するようになる。つまり、文姜の死が荘公の外交姿勢を大きく転換させる要因となったと言える。

このような第三時期の魯の動きに対して、斉の対応はどのようなものであったのだろうか。斉はこの時期、同盟諸侯国を動員して頻繁に出兵を行っており、魯に対しても荘公一九年に出兵している。但し、同盟から離反した宋・鄭に対してはすぐに出兵し、同盟に復帰させていることと比較すると、徹底されたものとは言いがたい[36]。この時期、斉は文姜を通じて魯の動向をある程度把握できていたと思われる。すなわち、文姜は斉桓公の時代においても、一貫して斉の意向に沿って行動したと考えられ、荘公もその動きを容認していたと見るべきだろう。この時期の文姜の動きについて、鈴木氏と小林氏の二つの見方を紹介したが、このように見ていくと、筆者は鈴木氏の指摘がより実態に近いと考える。

さらに、もう一つの問題として、荘公夫人哀姜の婚姻時期について考える必要がある。前述したように、荘公二二年に「納幣」が行われ、哀姜は荘公二四年に魯に嫁いでいる。荘公はこのときすでに三〇代後半を迎えており、夫人を迎える時期としてはかなり遅いと言える。『左伝』によれば、荘公には孟任（魯の党氏の娘）という夫人がいたとされ[37]、その子公子般が荘公の後継者と目されていることを見れば、会箋の指摘するように孟任に対する配慮があった可能性はある[38]。しかしながら、当時において複数の夫人を迎えることは不自然なことではなく、さらに生家の力関係を考えれば苦しい解釈と言える。哀姜との婚姻が成立したのは文姜の死去した翌年であり、この婚姻の背景に文姜の死が影響していることは疑いないと思われる。

この婚姻では荘公が斉に赴いて成立させ、且つ哀姜を迎える際にも荘公自ら斉に赴いている。婚姻に際して、魯侯自ら夫人を迎える事例はこれのみであり、やはり異例の事態であったと言えよう。これに対して、斉からは誰も来た事が記されておらず、文姜の婚姻の時とは大きな違いを見せている。その他にも魯はこの婚姻に当たり、礼を超えた過剰な対応をしており[39]、そうした行為は『左伝』の中で非難されている。このような魯の対応は、この婚姻が魯にとって差し迫った必要性によるものであり、文姜の死が魯にとって斉との結びつきが薄くなることを意味していたと考えられる。魯・斉外交における婚姻の重要性を確認するとともに、それまでの文姜を通しての斉との関係構築、さらに言えばそうした文姜の政治的影響力の強さを知ることができよう。

以上のように、文姜の外交活動を見ていくと、夫桓公の時代にはほとんど見られず、息子である荘公の時代になると活発になっている。では、桓公期と荘公期とで文姜の活動頻度にこのような波が生じるのはいかなる要因によるのであろうか。

これまで見てきたところ、まず桓公期と荘公期における魯・斉関係の違いが挙げられる。すなわち、桓公期の魯は斉と対立しており、魯・斉間の交流が少なかったのに対し、桓公の対外政策が失敗に終り、斉によって桓公が殺害された後の荘公期には斉との協調を図る必要があった。

また、荘公期には文姜が一貫して魯における対斉外交の主導権を握っていたと考えられるが、第三時期、つまり斉桓公の時代になると文姜の外交活動が第二時期に比

べて少なくなっている。同じ荘公期でも斉襄公の時代には活発であった文姜の外交活動が、斉桓公の時期になるとあまり活発ではなくなるのは何故であろうか。

文姜と斉との関係について見てみると、文姜は斉僖公の娘であり、襄公・桓公にとっては妹に当たる人物とされる。斉襄公については、『左伝』の記述する文姜と斉襄公とのただならぬ関係は、それが事実であるかどうかはともかく、両者の関係が極めて密接であったことを物語っている。(40) 一方、斉桓公との直接的な関係は史料上知ることはできない。しかしながら、斉桓公は襄公同様に文姜の兄でありながらも、襄公とは対立して国外にいた人物であった。すなわち、文姜は斉においては襄公側の人間であり、襄公とは対立関係にあった桓公とは兄妹であっても政治的な結びつきは決して強くはなかったと考えられる。

このように、荘公期における文姜の外交活動の頻度の違いは、文姜と斉襄公・桓公との結びつきの強さの違いによって生じたものと考えられる。これまで魯・斉関係の変遷と文姜の動向を通して、魯・斉間における婚姻の重要性を見てきた。荘公期の文姜は一貫して魯の対斉外交の主導権を握っており、その動向は斉の意向に沿ったものであったが、その反面、文姜の斉に対する影響力は襄公・桓公という斉侯との極めて個人的な関係性に影響される部分があったとも言えよう。但し、それでも尚、これまで見てきた文姜の外交活動の頻繁さは他の夫人のそれに比して極めて特異なものと言える。文姜が何故このような活発な外交活動が行えたのか。その原因を考えるために、次に魯国内における文姜の位置づけについて見てみたい。

まず、荘公は文姜の子である。中国古代においては、女性は嫁いだ後も生族との縁が切れず、その子供もまた母の生族の一員とみられて、母の生族と極めて密接な関係を持つとされている。(41) 斉襄公の時代には、文姜はまさに斉襄公との兄妹関係と荘公との母子関係によって魯・斉関係においてその影響力を十分に発揮できたと言えよう。さらに、その影響力は自身とは血縁的にはともかく、斉公族としての政治的立場では結びつきの弱い斉桓公の時代においても、荘公に及ぼすことができたと思われる。しかしながら、文姜が夫である桓公の時代にはほとんど活動が見られないことや、このような頻繁な外交活動を見せる女性が魯侯夫人の中でも文姜に限定されることは上述の理由だけでは説明できない。さらに、文姜の生き

た時代、すなわち桓公期・荘公期における魯の政治状況を考慮に入れる必要があると思われる。

前稿で述べたように、桓公期には魯の外交活動のほとんどを桓公が進めており、公子・大夫の動向はほとんど見られない。こうした状況から、桓公の政治力は他の魯侯に比べて非常に強かったと思われ、文姜もまた活躍の余地がなかったと思われる[42]。これに対して、荘公期には単発的ではあるが、公子たちの活動がしばしば見られるようになる[43]。その中でも文姜の外交活動は他の公子に比して極めて活発であり、荘公期における魯の対外政策において文姜が重要な位置づけを担っていたと言える。

このように文姜の活動頻度に桓公期と荘公期とで違いが見られる背景には、桓公と荘公の政治力の違いが挙げられよう。すなわち、桓公がほぼ独断で対外政策を進めていたのに対し、荘公の政治力は相対的に低下していたと考えられる。こうした君主の政治力に違いが生じる要因をはっきり述べることはできないが、『左伝』を見る限り、桓公が当初から太子と見なされており、しかも兄である隠公を殺害して即位するほど積極的な人物であったのに対して、荘公は父の桓公が斉に殺害され、斉の圧迫を受ける状況で即位し、またその死後には兄弟である公子慶父が公位を狙っており、桓公に比べてその政治的地位がやや安定感に欠けていた感は否めないだろう。文姜の外交活動に見られる、桓公期と荘公期における頻度の違いはこうした魯国内の政治状況とも対応していると言えよう。

3）小結

以上のように、文姜の活動を三つの時期に分けて見てみたが、その外交活動には活発な時期とそうでない時期が存在し、文姜は桓公期にはあまり目立っていない一方で、荘公期には一貫して魯・斉外交の主導的立場にあったと言える。こうした文姜の動きは斉の意向に沿ったものであったと思われるが、その中でも文姜の影響力が最も強く働いたのは第二時期である。この時期は、斉では文姜とは政治的結びつきの強い兄襄公の時代であり、また魯では自身の子荘公の時代となっており、しかも荘公期は桓公期と比べて君主の政治力が低下していたと考えられる。このような条件が文姜にとって非常に活動しやすい状況を作り出していたと考えられる。これに対して、第一時期にはほとんど活動が見られず、第三時期になるとその外交活動が少なくなっているように思われる。そ

の要因として、第一時期は魯・斉が対立関係にあった上に、魯において夫桓公の政治力が強く、他の公子・大夫同様活躍の余地がなかったためと考えられる。これに対して、第三時期には斉襄公と対立していた桓公の時代となり、斉との政治的結びつきが比較的弱かったためと考えられる。その一方で、第三時期は第一時期と比べて魯の君主の政治力が弱かったこともあり、文姜が魯・斉間で一貫して影響力を保持することができたと思われる。

以上のように、文姜の動向について見てきたが、このような夫人の活発な外交活動は魯国史の中ではどのように位置づけることが可能であろうか。次章において、哀姜・声姜を見た上でさらに考えてみたい。

## 2．魯侯夫人と桓公の公子たち―第一期②―

本章でも引き続き、荘公夫人哀姜と僖公夫人声姜の婚姻とその動向を中心に魯・斉関係について見ていくことにしたい。当時の斉は桓公のもとで中原での覇権を確立しており、魯は斉との協調を図っていくことになる。その中で大きな役割を担ったのは桓公の公子たちである。本章では、二人の夫人と桓公の公子たちとの関係についても注目していくことにしたい。

### 1）哀姜と公位継承問題

荘公夫人哀姜が文姜のように魯・斉関係に直接的な役割を果たした様子は資料から伺うことはできない。文姜の死後、斉との交渉はほとんど荘公が担っており[44]、魯・斉関係も以前と比べて安定していたことから、哀姜に活躍の場はなかったようである。

荘公との間に子はいなかったようであり、荘公の死後、魯で公位をめぐる内紛が起こった際には、斉は哀姜の娣叔姜が生んだ閔公の擁立を支持している。これに対して、自らが国君になろうとした公子慶父（荘公の異母兄弟）は哀姜と「通」じて閔公を殺害する。公子慶父と共謀した哀姜の動向は実家斉の意向に反したものであり、哀姜は斉によって殺害されてしまう。

鈴木氏は文姜と哀姜がともに魯侯殺害に関与したにも関わらず、その後、魯に帰国し、魯・斉関係において活動する文姜に対して、哀姜は実家である斉によって殺害されるという、二人の女性の末路の違いについて、文姜は実家のプログラムにのっとって行動したものであり、哀姜は斉の意向に反した行動をとったためによると指摘する[45]。また、『左伝』は斉が哀姜を殺害したことについて、「君子、斉人の哀姜を殺すを以て、已甚だしと為す。

女子は人に従ふ者なり」（僖公元年）と批判しているが、鈴木氏は哀姜が斉によって殺害されている点について、実家の女性に対する支配力の強さを表すものと指摘している。[46] 従うべき見解であろう。ただここで注意すべきは、哀姜が斉の意向に反した行動を取ったことである。前章で見たように、文姜の行動はあくまで魯・斉関係の中で行われており、基本的には斉の意向に沿ったものであった。それに対して、ここでの哀姜の行動は文姜のそれとは異なるものであり、その行動が必ずしも斉の意向に制約されるものではなかったと言える。[47]

この公位争いは一面では公子友・公子慶父・公子牙という桓公公子間の権力争いでもあった。荘公の後継者をめぐって、荘公と孟任の子公子般を推す公子友に対して、公子牙は公子慶父を推していた。まず、公子友が公子牙を自殺させ、公子般を擁立するが、その公子般は公子慶父によって殺害される。次に公子慶父は閔公を擁立するが、ここに斉の意向があったことは前述した通りである。一方、この時点で権力争いに敗れた公子友は国外に出ていたが、閔公元年秋には閔公と斉桓公とが落姑で盟を交わし、公子友を帰国させている。公子友の帰国は自らが国君になろうとする公子慶父と閔公との間に亀裂が生じていたためと考えられており、[48] 閔公を支持する斉は公子慶父を牽制するため、公子友の帰国を承認したと思われる。しかしながら、翌閔公二年、公子慶父は哀姜と「通」じて閔公を殺害する。これに対して、公子友は僖公（荘公の子）を擁立して、公子慶父を殺害し、哀姜は斉によって殺害される。『左伝』によれば、僖公の母は成風といい斉出身の女性ではなく、僖公を国君とすべく公子友に「事」えたとされている。[49]

このように、荘公の後継者をめぐる争いは桓公公子たちによる権力争いでもあり、そこに哀姜・成風という二人の女性が介在しているが、『左伝』の記述は両者の関わり方に差をつけている。すなわち、哀姜は公子慶父の後ろ盾と見なされているのに対して、成風は公子友に自分の子の後ろ盾を求めている。公子慶父としては哀姜を通して、斉の援助を期待したと思われるが、この公位争いにおける哀姜の行動は斉の意向に反するものであり、斉は公子慶父の閔公殺害に対して、僖公と公子友を支持したと思われる。文姜が一貫して斉の意向に沿って行動したと見られるのと比べると、夫人に対する実家の拘束力が低下したと言えるだろう。

2）声姜と公子の台頭

僖公夫人も斉から迎えた声姜という女性である。しかしながら、声姜を魯に迎えた時期について、『春秋』『左伝』には記載されていない。会箋は声姜を桓公の娘で、僖公の公子時代に迎えられたとしている。会箋に従えば、斉が外援として娘婿たる僖公を援助した可能性は考えられるが、いまひとつはっきりしない。いずれにしろ、荘公死後の公位争いに斉の介入が少なからず見られることや僖公の即位後の緊密になっていく魯・斉関係を見る限り、僖公の擁立においても斉の意向があったと考えるべきであろう。また、僖公にとっても、即位前後に斉女を夫人に迎えて、斉との関係強化を図る必要があったことは間違いないと思われる。

僖公の母が斉出身の女性でない以上、僖公夫人声姜の存在は魯・斉関係において重要な存在であったと思われるが、声姜の活動は外交における二例のみである。まず僖公一一年経文に「夏、〔僖〕公、夫人姜氏と斉侯（桓公）に陽穀に会す」とある。この記事については『左伝』に記述がなく、詳しいことはわからないが、夫人が夫を連れて実家に赴く例は文姜の場合でも見られたことであり、その際には桓公が殺害されていることから見ると、この行動も政治的意味のあるものであったと考えられる。もう一つは、僖公一七年に斉桓公と卞で会している。この件については、同年に魯軍が項を滅ぼしたことを咎められて斉に捕らわれた僖公の釈放を求めたとされ、これにより僖公は帰国している。

僖公の時代を見てみると、前半は斉桓公が中原の覇権を握り、魯も斉の主宰する会盟にほぼ参加しており、以前に比べて魯・斉の関係が安定していたと言える。また、魯から斉への一方的な遣使が恒常化しており、斉の魯に対する優位が明確になった時期でもある。こうした対斉外交を僖公とともに担ったのは公子友を中心として、公孫敖（公子慶父の子）・公孫茲（公子牙の子）という桓公の公子・公孫であった。このような状況を宇都木氏は「桓公の公子・公孫達による僖公政治の補佐時代」[50]と評している。

一方、後半は僖公一六年に魯の対斉政策を牽引していた公子友が死去する。また、斉では翌僖公一七年に斉桓公が死去し、桓公の公子たちによって公位をめぐる争いが起こる。当初、斉では公子無虧が国君として立ったが、孝公を推す宋襄公に攻められると、斉は公子無虧を殺害して孝公を擁立する。これにより斉に代わって宋が台頭

してくるようになる。これに対して、魯は公子無虧を支持していたらしく[51]、斉孝公の時代になると魯・斉関係は疎遠になり、さらに、僖公二六年に二度にわたり斉の侵攻を受けると、魯は公子遂（荘公の子）が楚に出兵を要請し、僖公が楚軍を率いて斉を伐つなど、魯・斉間は敵対関係へと転じている。

また、僖公期の魯の特徴として、前半は公子友、後半は公子遂と特定の公子たちの活躍が目立つようになってきたことが挙げられる。荘公期までは、公子が単発で行動するケースは見られるものの、特定の公子・公孫が政治の主導権を握ることはなかったが、僖公期には特定の公子が君主の補佐役として政治の中枢を担うようになっている[52]。

こうした状況において声姜の活躍の場はほとんどなかったようである。但し、前述したように、僖公が斉に拘束された際には声姜が斉桓公と会し、僖公の釈放をはたしている。魯侯夫人が依然として魯・斉間のパイプ役として直接的に機能していたと考えられるが、なぜ声姜が赴いたのかという点について、いま少し考察を進めると、当時の魯は対斉外交を進めていた公子友が死去した直後であった。公子友の死後、魯は僖公が積極的な軍事行動を進めており、公子遂の出現（僖公二六年）まで僖公が政治の主導権を握ったと考えられている[53]。しかしながら、筆者は前稿で公子友死去の翌年、魯が項を滅ぼしたのは僖公が魯に不在であったときであり、こうした軍事行動の背景には公子友の対斉協調路線に対する国内の不満が考えられ、必ずしも僖公の意思ではなかったのではないかと推察した[54]。当時の魯の政治体制は公を公子・公孫という公の家族が補佐する公室政治と呼ばれるものであったが、公子友の死から公子遂が登場するまで魯では僖公を補佐しうる人物が現れておらず、このときの声姜の動きは、公子友の死去から斉桓公が死去するまでの間、魯の対斉政策に生じた外交担当者不在という政治的空白を埋めるものと考えられる。

声姜は文公一六年まで生き、その間に魯では声姜の子文公が即位し、文公には斉から出姜が夫人として迎えられている。一方、斉では桓公から孝公・昭公・懿公と君主が変わっていくが、僖公一七年以降の記事に彼女の政治的な動きは見出せない。

3）小結

以上のように、第一期の後半、哀姜・声姜の婚姻とそ

の動向を確認した。個々の婚姻の成立事情や夫人の動向については本章で触れてきた通りである。ここでは夫人の活動が魯の政治体制の中でどのように位置づけることができるかを整理しておきたい。

哀姜と声姜の二人は斉桓公が中原における覇権を確立した時期に魯に嫁いでおり、婚姻後の魯・斉関係は比較的安定している。哀姜の外交活動は史料上見られないが、荘公の死後に公子慶父の閔公殺害に関与している。哀姜の行動は実家の斉の意向に反したものであり、哀姜は斉によって殺害されている。哀姜が斉の意向に反した行動をとっていることは前章で見た文姜の活動と比較すると、実家の女性に対する影響力が相対的に低下したと言える。

声姜も目立った政治的な活動を見せることは少ない。声姜の嫁いだ僖公期は、公子友や公子遂という特定の公子たちが君主を補佐する体制が出現した時代であり、声姜が活躍する場は少なかったと思われる。但し、夫僖公が斉に拘束された際には、声姜が斉桓公と会談し、僖公の釈放を果たしている。夫人が依然として魯・斉間のパイプ役として機能しているが、魯国内においては、それまで対斉外交を牽引した公子友が死去した直後であり、魯・斉間に生じた政治的空白を、公室の一員として補う働きがあったと考えられる。公子友の死後、僖公が中心となって活動するようになるが、こうした状況は文姜の死後、荘公の活動が活発になっていく状況に類似するものと言えよう。このように見ていくと、文姜の活動がこの時期の公子たちに比して極めて活発であることは、公子友や公子遂といった特定の公子が台頭してくる以前、夫人が君主の外交活動を補佐するという、いわゆる公室政治の初期段階として評価できよう。

本章で見てきた哀姜・声姜に見られる実家の影響力の低下や夫人の外交活動の減少は、魯・斉間における婚姻の機能の低下を意味するものでもある。その原因は頻繁に起こる公位継承争いや目まぐるしく変わる国際情勢によって、血縁的な結びつきよりもより現実的・政治的な結びつきが機能する社会へと移っていく状況が考えられる。

## 4．魯・斉婚姻と晋の台頭―第二期―

僖公二八年、城濮の戦いで晋が楚に勝利すると、晋は践土の盟により中原における覇権を確立する。この晋の台頭は魯・斉関係にも大きな影響を与えたと考える。また、僖公期の晩年以降、晋・斉・楚という三つの大国と

いかに向き合うかという課題が生じ、外交における役割が多岐にわたるようになり、公子遂や新たに台頭してきた世族の外交活動が目立ってくるようになる。

本章では、魯・晋関係や世族の動向にも注意しながら、引き続き斉との婚姻及び魯侯夫人の動向について見ていくことにしたい。

1）出姜の婚姻

文公は声姜の子とされる。文公の即位に関して、『左伝』には特に記述がない。当時の国際情勢を見ると、僖公二八年に晋文公が中原における覇権を確立すると、魯は晋に接近するようになる。一方、斉では僖公二七年に魯と敵対関係にあった孝公が死去し、また斉も晋の主宰する会盟に参加していたことから、斉桓公の死後、疎遠になっていた斉との関係も改善した。国内においても、僖公の公子は史料上文公以外には見られず、文公は国内外の情勢が比較的安定した状況で順当に即位したようである。

文公夫人出姜は文公四年に魯に嫁いでいる。この斉との通婚はまず、公子遂が文公二年に斉に赴いて「納幣」をしており、公子遂がこの婚姻を主導したものと考えられる。公子遂は、僖公期の晩年に晋・斉・楚との間で外交交渉に当たり、楚の中原進出と斉からの侵攻という二つの脅威にさらされた状況を打開した人物であり[55]、当時の魯の政権担当者と言えよう。但し、文公期の魯は公子遂を中心として、季孫行父や叔孫得臣といった三桓氏と呼ばれる世族も出現しているが、この婚姻では、実際に出姜を迎える際には魯から卿が赴かなかったとされている。この点について、『左伝』は「非礼」と非難しているが、ここでもやはり当時の政治的状況を考慮する必要があるだろう。

践土の盟以降、魯は晋に接近しているが、僖公三二年に晋文公が死去すると、魯の対外政策には変化が見られるようになる。まず、僖公三三年、斉昭公が国帰父を使者として魯に派遣したのを受けて、僖公自らが斉に赴いている。これに対して、晋からは文公二年、文公が朝見しないことを咎められており、晋文公の死後、魯は晋と距離を置こうとしていたことが窺える。さらに晋は朝見に訪れた文公を晋侯とではなく、大夫の陽処父と盟を交わさせている。公子遂が斉に赴いてこの婚姻を成立させたのは、こうした魯・晋関係が悪化していく状況においてであり、この婚姻は魯の斉への再接近を示すものと言

えよう。しかし、翌文公三年には晋の要請を受けて魯は晋と再び盟を交わし直しており、魯・晋関係は一応修復している。出姜を魯に迎えたのはその翌年のことであり、このとき魯から卿が赴かなかったのは晋に対する一定の配慮があったものと思われる。こうした「納幣」と夫人を迎える際の対応の違いは、魯の晋に対するスタンスの変化を反映したものと言えよう。

この出姜との婚姻は魯・斉関係が新たな局面を迎えたことを感じさせる。僖公の晩年以降、魯は斉だけでなく楚の脅威にもさらされるようになり、晋との関係強化の必要性にも迫られるようになった。その反面、魯・斉関係が悪化した場合には、晋あるいは楚に救援を求めることが可能となったことも大きな変化と言えよう。この時期、斉は確かに対外的な行動をほとんど見せていないが、晋文公の死後、晋の主宰する会盟・軍事行動にもほとんど参加しておらず[56]、晋にとっては依然として警戒すべき大国と言える存在であったと思われる。つまり、魯・斉の婚姻は晋という大国の警戒心を生じさせる可能性を含むものであり、晋の台頭はこれまでの魯・斉の二国間関係に新たな局面を迎えさせることになったと考えられる。

2）出姜の外交活動

出姜に関する記事を見ていこう。出姜についても一例のみだが外交活動が見られ、文公九年に斉に赴いている。『左伝』にはこれに関する説明はなく、杜注はこれを「帰寧」、即ち単なる里帰りと解している。しかしながら、当時の魯は文公六年に晋襄公が死去すると、翌文公七年に晋の内紛の隙をついて邾に侵攻し、ついで須句を占領している。さらに、同年の扈の盟では文公が遅刻したため、翌文公八年に公子遂がその謝罪のために晋の趙盾と衡雍で盟を交わしている。このように、晋襄公の死を契機として魯は再び晋から距離を置こうとしており、魯・晋関係が不安定なものとなりつつあったことが見て取れる。

一方、斉との関係は『春秋』や『左伝』を見る限り、出姜との婚姻以降途絶えている。但し、当時の斉昭公の時代は、その約二〇年間の在位期間、対外的にほとんど目立った動きを見せておらず、魯・斉の間でも目立った出来事は起こっていない。また、斉昭公は魯女の子叔姫を夫人としており、魯・斉関係は概ね良好であったと考えられる。しかしながら、前述のように斉は晋の主宰する会盟にも参加しておらず、晋とは対立する存在であり、

出姜の動向は魯・斉が再び接近しようとする政治的な意味を含んでいたと見るべきであろう。この時期の魯の対外政策は晋との関係に左右されるものであり、一貫して晋とは距離を置く斉に対して、魯は晋・斉双方の顔色を窺う必要があった。しかも、晋襄公の死後、楚が中原進出を活発化させるようになると、再び晋との関係強化が図られている[57]。このような状況で、公子遂たちは晋への対応に追われており[58]、出姜が魯・斉外交の担当者としての役割を担ったと推測される。すなわち、出姜の動きも声姜の場合と同様、魯・斉外交の政治的空白を補うものであったと言えよう。しかしながら、この出姜の行動は、『左伝』を見る限り、その後の魯・斉関係に何の影響も与えていない。楚の中原進出に対して、魯は自国の安全を斉ではなく、晋との関係強化に求めたためである。婚姻関係よりも現実的な力関係が優先された対外政策であったと言える。

魯・斉関係に変化が見られるのは斉昭公の死後である。斉昭公と子叔姫との間に生まれた舎はその跡を継いだ直後に、昭公の弟に当たる公子商人によって殺害され、公子商人が懿公として即位する（文公一四年）。斉懿公は極めて好戦的な国君であったらしく、その在位期間には頻繁に魯に出兵している。こうした状況において、魯は公子遂を中心として斉に繰り返し和議を求めているが[59]、そこでの出姜の動向を知ることはできない。また斉懿公が即位した時点で、僖公夫人声姜もまだ存命であったが、一切表に出ることはなく、それどころか斉の侵攻のため、葬儀の時期を遅らせざるを得なかったとされている[60]。

以上のように、文公期の魯・斉及び魯・晋関係から出姜の外交活動の意義について確認した。史料上、出姜の外交活動がその後の魯・斉関係に影響を与えたとは考えられず、そのことはもはや「外援」としての斉の影響力を、夫人を通じて及ぼすことができなくなったことを示唆するものであり、これにより魯・斉関係における夫人の政治力も失われたと言えよう。魯侯夫人の外交活動が見られるのが、この出姜までであり、宣公夫人穆姜と成公夫人斉姜が斉に赴いたという記事は見られないことは、魯・斉関係において夫人の役割が失われたことを示している。

3）出姜の帰国について

斉の侵攻は文公一八年に斉懿公が殺害され、代わって恵公が即位したことでようやく収まるが、懿公が殺害さ

れる直前、魯でも文公が死去している。出姜と文公との間には公子悪・公子視という二人の公子がおり、彼らは当然公位継承の有力候補であったはずだが、公子遂はこの二人の公子を殺害し、敬嬴の生んだ宣公を擁立する。宣公の母である敬嬴は、斉の女性ではなかったが、斉では即位したばかりの恵公が魯との友好を図るために当時の政権担当者であった公子遂の宣公擁立を支持したとされる。出姜はいわば嫁ぎ先と実家双方から見捨てられた形となり、怨みを残して斉に帰国する。『左伝』によれば、出姜は「哀姜」とも呼ばれたとされている[61]。宣公の母敬嬴は自身の子を国君とするべく公子遂に「事」えたとされ、こうした状況は確かに荘公の死後における哀姜と僖公の母成風によく似ている。また、出姜が我が子の殺害に加担した斉に帰国したことは哀姜の場合と同様、女性に対する実家斉の強い影響力が窺える。しかしながら、実家の意向に背いて国君殺害に関与し斉に殺害された哀姜と異なり、出姜はなすすべなく自身の子を殺害され、さらに自身を裏切った実家に帰国せざるを得なかった。このような公位継承をめぐる哀姜と出姜の立場の違いは魯侯夫人の政治的地位がさらに低下したことを表している。魯侯夫人の政治的地位の低下は、文姜に見られたような斉が夫人を通して魯に影響力を及ぼすという、婚姻の政治的機能の低下をも示すものと言えよう。

出姜を母とする公子を殺害した公子遂は宣公元年にすぐさま斉に赴き、新君宣公の夫人として穆姜を迎えている。公子遂は言うまでもなく当時の最高権力者であり、宣公の即位後まもなく婚姻を結ぶという行動は哀姜の時同様、魯にとって非常に差し迫った状況を感じさせる。さらに、婚姻成立の直後、「平州に会して、以て公の位を定む。東門襄仲（公子遂）、斉に如きて成ぎを拝す。六月、斉人、済西の田を取るは、〔宣〕公を立つるが為の故に、以て斉に賂ふなり」（宣公元年）とあり、このような頻繁な対斉外交は宣公擁立に際して「外援」たる斉の後ろ盾が大きかったことを表している。もはや夫人が魯・斉外交において機能することはなくなっていたが、婚姻が魯・斉関係を強化するものとして尚重視されていたことがわかる。

こうした宣公擁立に至るまでの斉恵公の態度は、『左伝』を見る限り、先君殺害による即位直後という斉国内の不安定さを背景としたものであり、公子遂の行動に対して受動的な印象を受ける。ところが、宣公期の魯・斉関係を見ていくと、〔表1〕で見たように魯の斉への使

者派遣が一二例に対して、斉から魯へはわずか三例と明らかに魯が斉に対して追従路線をとっており、さらに魯からは毎年のように宣公や公子遂たちが斉に赴いているのに対して、斉は魯に対してしばしば非礼とも言える対応をとっている[62]。一方、晋は斉から侵攻を受けた魯が救援を求めた際に、斉から「賂」を受け取り引き揚げてしまい（文公一五年）、これ以降、晋との関係は「晋侯（成公）の立つや、〔文〕公、朝せず。又大夫をして聘せしめず」（宣公七年）とほとんど断絶状態にあった。斉からの侵攻に対して、晋の救援が得られず、また当時は楚荘王が中原進出を活発化させており[63]、こうした状況において、魯は安全保障の点から斉との関係を深める必要があったと考えられる。『左伝』を見る限り、この時期の魯・斉の関係は協調というよりも、魯が斉に一方的に依存していたと言うべきであり、宣公擁立の背景にはやはり斉恵公の意向があったと思われる。

　では何故、斉は出姜を見捨てたのであろうか。斉と出姜の関係を見ていくと、出姜の婚姻が行われたのは斉昭公の時代である。昭公は桓公の子であり、即位直後に城濮の戦いで晋が楚を破り、践土の盟で中原での覇権を確立したためか、昭公の時代、斉は対外的にほとんど目立った動きを見せることがない。その後、斉懿公が昭公の子舎を殺害して即位するが、懿公もまた殺害され、恵公が即位する。斉恵公は懿公に批判的な人物であり、懿公が殺害された時には衛にいたとされる。このように、昭公・懿公・恵公は互いに対立関係にあった。斉では桓公の死後、六人の公子が公位をめぐって争い、一旦は宋襄公の支持した孝公が即位して終結したものの、〔図1〕のように孝公以降も桓公の公子が相次いで国君の地位についており、桓公公子間の対立が長くくすぶり続けていたことを窺わせる。斉昭公の時代に魯に嫁いだ出姜は、昭公に近い人物と考えられ、公位をめぐって昭公と対立した懿公や恵公とは政治的結びつきが弱かったものと思われる。孔穎達の疏は斉恵公が公子悪殺害を容認した理由を「悪は是れ外甥、斉侯悪を廃するを許すは、悪は世適嗣を以て立ち、斉の恩を受けず」と述べているように、出姜の子である公子悪もまた斉にとって結びつきの薄い人物であったと言える。前章において、文姜の外交活動には斉襄公・桓公それぞれとの個人的な関係性が影響していると述べた。こうした関係性は出姜においても同様であったと見られる。但し、文姜が自身との結びつきの薄い斉桓公の時代においても魯・斉関係のパイプ役とし

て機能したことと比較すると、出姜においては実家との結びつきが相対的に希薄となっていく様子が見て取れる。

宣公の即位後、先君文公の喪中にも関わらず穆姜を迎えた背景には、政治的にはすでにお荷物となった出姜を廃し、穆姜を迎えることで魯・斉関係を新たに強化していく意図があったものと考えられる。但し、斉が斉女出姜を母に持つ公子悪ではなく、敬嬴の子宣公を支持したことは血縁的な結びつきより政治的結びつきが重視された結果と言えよう。すなわち、婚姻の政治的機能に対する期待を依然として強固に残しつつも、血縁を通して政治的影響力を及ぼすという婚姻が本来持っていた機能は基本的には失われつつあったのである。

4）小結

晋が中原の覇権を確立した第二期は、魯にとっても対晋外交の重要性が高まっている。一方、斉では桓公公子による公位継承が依然として続き、昭公・懿公・恵公とそれぞれ対立関係にある国君が相次いで即位する。そのため、〔表2〕で見たように、斉の対魯政策は国君によって大きな波があり、魯の対外政策もこうした斉の政権交代に大きく影響されている。さらに楚の中原進出もあり、魯の対外政策は非常に不安定になりやすい状況にあった。こうした君主交代が魯・斉関係に影響する状況は、吉本氏が指摘する諸侯国間の関係が諸侯の人格的な関係によって維持されているという状況を示すものと言える(64)。

またこの時期、魯の政治体制は依然として公室を中心としたものであったが、新たに三桓氏などの世族も台頭してくるようになり、魯の対外政策は公子遂や三桓氏によって担われることとなった。これに対して、魯は斉から文公夫人出姜、宣公夫人穆姜を迎えており、また僖公夫人声姜も存命であったが、魯侯夫人の外交活動は出姜が一度斉に赴いたのみであった。出姜の行動もまた魯の対斉政策の空白を補う意義があったと思われ、この時期の魯侯夫人も君主や公子同様、当時の公室政治の担い手として機能したと思われるが、その成果を史料から読み取ることはできない。ここにおいて夫人の魯・斉のパイプ役としての役割はほぼ終焉を迎えたと言えよう。さらに、公位継承をめぐる出姜の立場が荘公夫人哀姜と比べて非常に弱く、夫人の政治的地位の低下も見て取れる。こうした変化は同時に、婚姻の意義を以前と比べて希薄なものへと変えていくものであった。

## 5．魯・斉婚姻の終焉と三桓氏―第三期―

宣公一八年、宣公が死去すると、公子遂の子公孫帰父は失脚し、成公期の魯の政治の中心は従来の公子・公孫から三桓氏をはじめとする世族へと移った。また、この成公期は魯の対外政策の比重が斉中心から晋中心へと移行する時期でもある。本章では、成公期に見られる魯の政治体制及び対外政策の移行が魯・斉の婚姻や夫人の立場にどのような影響を与えたかを見ていくことにしたい。

### 1）最後の婚姻

成公夫人斉姜は成公一四年に魯に嫁いでいる。即位後一四年も経ってのこの婚姻は荘公と哀姜の婚姻に次いで遅い結婚である。

宣公期の魯・斉関係は前述したように非常に緊密であったが、その晩年になると、両国の関係に変化が生じ始める。宣公一〇年に斉恵公が死去し、頃公が即位すると、魯は宣公・公孫帰父・季孫行父が相次いで斉に赴き、斉からも国佐が使者として来聘するなど、魯・斉関係が改めて確認されている。こうした両国の、特に魯からの頻繁な遣使は君主の交代が両国の関係に大きな影響を与えるものであったことを示しているが、その後、楚が中原進出を活発に進めるようになると魯は再び晋の同盟下に入り、斉との関係は次第に悪化していくことになる。この時期、公子遂はすでに死去しており（宣公八年）、その子公孫帰父が魯の政権の中心的役割を担っていたが、魯の対外政策は晋・斉・楚の間で一貫性を欠くようになる[65]。その結果、宣公の死後、公孫帰父とその一族は追放され、新たに三桓氏が政権を担うようになる。一方、魯・斉関係は、成公期に入り、ますます緊張状態を高めていき、成公二年に鞌の戦いを引き起こす。結果は斉の侵攻を受けた魯・衛が相次いで晋に救援を求め、晋の出兵によって斉が大敗を喫して終わる。これ以降、斉は晋に屈服することになり、魯の対外政策の比重も斉から晋へと大きく移っていくことになるが、鞌の戦い以後、魯・斉の二国間交流は『左伝』を見る限り成公一〇年まで断絶しており、魯・斉関係はすぐには改善されなかったようである。ようやく魯から斉に使者が派遣されるのは成公一一年のことであり、このとき斉に赴いた叔孫僑如は成公一四年にも斉に赴き、成公夫人斉姜を迎えている。

魯の対外政策の比重が斉から晋へと移っていく中で、

何故再び斉との婚姻が結ばれたのであろうか。一つには、成公の晋に対する不信感があったように思われる。『左伝』に見える成公の言動は、魯の対外政策が晋との協調政策へと完全に移行するわけではなく、両国間に緊張関係が存在していたことを示している[66]。また、斉でも魯と争った頃公が死去し、子の霊公が即位している。斉霊公は魯から顔懿姫を夫人として迎えており[67]、この君主交代は両国の軋轢を解消する契機となったと思われる。こうした成公の晋に対する不信感と斉における君主交代によって、魯は再び斉との関係正常化を図り、斉姜を迎えたと考えられる。

このことは魯・斉関係において、婚姻がまだ有効な手段として考えられていたことを示すものと言えるが、斉姜が嫁いだ成公一四年以降、斉との二国間交流は襄公二〇年まで途絶えており、実際にこの婚姻が政治的に機能したようには思われない。当時の斉は晋の主宰する会盟に一貫して参加しており、鄢陵の戦いで楚を破り（成公一六年）、勢いを増していた晋に対抗するだけの力がなかったことも要因であるが、なによりこの斉との融和策が魯の主流たる意見ではなかったようである。魯の政治の中心的な役割を担う三桓氏は台頭し始めた文公期以来、基本的に対晋外交を担当しており、そのため晋との交流が途絶え、斉に依存する状態であった宣公期には三桓氏の活動は目立たないものとなっていた[68]。この時期の魯・斉外交を担当した叔孫僑如は三桓氏の一つ叔孫氏の当主であったが、当時の叔孫氏は季孫氏・仲孫（孟孫）氏に対して劣勢であったとされている[69]。これまで斉との婚姻を担当したのが、荘公を含めいずれも政権の中心人物であったことと比較すると、魯における斉との婚姻の重要性がかつてほどではなかったことを窺わせる[70]。

さらに、成公についてはその生母がはっきりしない。会箋は穆姜とするが、『左伝』に見える穆姜の成公に対する言動から否定的な見方も存在する[71]。はっきりしていることは、成公が即位した当時、魯・斉関係は非常に緊張した状態にあり、成公の即位に関して従来の国君のように斉の影響があったとは考えにくいということであろう。また、成公期を通じて斉との交流も非常に少なく、成公と斉との関係は血縁的にはともかく政治的には極めて希薄であったと考えられる。

このように成公期はこれまでと比べて魯の対斉外交の比重が明らかに低くなっている。その要因は斉に晋と対抗する力がなかったことも挙げられるが、それだけでは

なく魯における公子・公孫から世族へという政治体制の移行と君主である成公が斉との政治的結びつきの薄い人物であったことが考えられる。このような状況においては、斉の影響力が魯に強く及ぶとは考えがたく、ここにおいて、魯・斉関係において婚姻が有効に機能する時期は終焉を迎えたと言えよう。こうした魯・斉間における婚姻の機能低下は魯侯夫人の政治的地位にも影響を及ぼしたと思われる。最後に、宣公夫人穆姜の動向を見ていくことにしたい。

2）穆姜と三桓氏

魯・斉関係が疎遠になり、穆姜も斉姜も外交面では活躍の場がなかったが、穆姜に関しては『左伝』に次のような記事が見られる。

> 宣伯（叔孫僑如）、穆姜に通じ、季（季孫）・孟（仲孫）を去りて其の室を取らんと欲す。将に行かんとす。穆姜、〔成〕公を送りて二子を逐はしむ。〔成〕公、晋の難を以て告げて曰く、請ふ反りて命を聴かん、と。姜怒る。公子偃・公子鉏趨りて過ぐ。之を指して曰く、女可かずんば、是れ皆君なり、と。
>
> （成公一六年）

成公一六年、叔孫僑如が穆姜と「通」じ、穆姜は叔孫僑如のために成公に季孫氏・仲孫氏の排除を求め、成公に拒否されると成公の弟である公子偃・公子鉏も国君の候補であると脅迫している。

この計画は結局失敗し、季孫行父は叔孫僑如を追放し、公子偃を殺害すると、穆姜も幽閉されるが[72]、ではこの内紛にもこれまでのように斉の介入はあったのであろうか。前述したように、叔孫僑如は成公期の対斉外交を担当しており、斉から嫁いだ穆姜と叔孫僑如の背景に斉の存在を見出すことは難しくないように思われる。しかしながら、当時は魯・斉間で新たな婚姻を結び、斉姜を迎えたばかりであり、また斉も穆姜を嫁がせた恵公の時代から頃公を経て、霊公の時代へと移っている。これまで見てきたように、斉の君主交代は魯・斉関係の重要な転機となっており、このような状況において、穆姜が斉の協力を得られたとは考えにくい。また、この内紛の後、穆姜は季孫氏によって幽閉されたとされている。これまで魯の内紛に巻き込まれた夫人たちの末路を見てみると、哀姜は斉によって殺害され、出姜は斉に帰国することを余儀なくされている。これらと比較すると、穆姜の末路には斉の介入が全く見られず、哀姜・出姜の場合とは大き

く異なるものである。

このように穆姜には実家の影響がほとんど及んでいないように思われる。そのことは婚姻によって「外援」を得るという婚姻の政治的機能も失われたことを意味している。但し、このとき晋から出兵を迫られていた成公が、公宮の守備を固めてから出発したために期日に遅れ、後日叔孫僑如の晋に対する讒言に利用されていることや、公子偃が殺害されていることから見ても、このときの穆姜の行動は公位継承を含めた権力抗争という極めて政治的なものであり、魯における穆姜の影響力も無視できないものであったと言えよう。筆者は前稿において、成公期はこれまでの公子・公孫から世族へと権力が移行しているものの、それは君主を取り巻く政権の構成員が代わっただけであり、後に見られる世族の力が君主を凌ぐような状況はまだ見られないと指摘したが(73)、穆姜はすでに実家の後ろ盾を持たなかったものの、公室の一員として魯侯に対して尚一定の影響力を有していたと思われる。

これに対して、斉姜は成公一四年に嫁いでから襄公二年に死ぬまで政治的な活動はまったく見られない。成公の後を継いだ襄公の母は斉姜ではなく定姒という女性であり、これ以後、斉から夫人を迎えた例は史料から窺えない。前述したように、斉姜の婚姻を担当した叔孫僑如は季孫氏・仲孫氏に比べて劣勢であり、そのことは斉との婚姻の重要性が低下したことを示すと同時に、斉姜の政治的地位をも穆姜以前と比べて低下させたと言えるだろう。さらに、襄公期になり、世族が権力を掌握し魯侯の力をも凌ぐようになると、公室の一員としての夫人の政治的影響力も失ったと考えられる。

このように、成公期において、魯における公室政治から世族政治への移行と対外政策における斉から晋への比重の移行とがともに顕著になっていくが、婚姻についてもその政治的意義が失われたと考えられる(74)。すなわち魯・斉間の婚姻の意義は、一つには魯の対外政策の比重が斉から晋へと移行したこと、もう一つには襄公期以降、三桓氏が君主の勢力を凌ぐようになり、君主が政治から切り離された存在となったことによって失われたと思われる(75)。さらに晋・楚が台頭するようになり、魯・斉二国間のみの関係強化が魯の外交政策に何の寄与もしない状況もまた婚姻の意義を薄れさせたと思われる(76)。

3）小結

以上のように、第三期には魯・斉関係がそれ以前とは

大きく変化している。すなわち、魯の対外政策の比重は斉重視から晋重視へと変わり、魯・斉関係は次第に疎遠なものとなっていく。このような状況で夫人の外交活動はもはや見られない。叔孫僑如と通じた穆姜は、成公に圧力をかけ、季孫氏・仲孫氏の排除を画策するが、その画策に失敗した後、季孫氏によって幽閉されている。それらは斉の関与を感知できないものであり、夫人に対する実家の影響力が希薄になっている。その中でも成公には斉から斉姜が迎えられているが、この婚姻が機能した形跡は史料上見られない。

こうした魯・斉関係が変化した背景にはまず、斉が鞌の戦いで敗れ、晋に屈服したという国際情勢が挙げられる。また成公期になると、魯の政治体制は公子・公孫を中心とした公室政治から三桓氏を中心とする世族政治へと移行するが、成公や三桓氏は従来の君主や公子と比べて斉との関係が希薄であった。これらの要因が魯の対斉外交の比重を大きく低下させたと考えられる。このような状況で成公夫人斉姜を最後に史料上から斉との通婚が見られなくなり、婚姻はその政治的意義を失い、夫人の活躍の場も失われていったのである。

## 結びにかえて

以上のように、魯・斉関係を確認しつつ、両国間の婚姻と魯侯夫人の動向について検討してきた。魯・斉の婚姻は当然のように行われているように見えて、極めて即時的な政治的意図によって結ばれている。斉は婚姻を通じて、特に魯の公位継承に対して強い影響力を及ぼすことが可能であり、また斉による桓公殺害への文姜の関与や哀姜の殺害、出姜の帰国などから魯に嫁いだ夫人に対する実家の支配力が極めて強いことがわかる。これは齋藤氏の指摘した婚姻の政治的機能が春秋時代において現実に機能していたことを示している。一方、こうした婚姻の機能は比較的早い段階で失われつつあり、哀姜が斉の意向に反する行動を取ったことや、斉が出姜の子を支持しなかったことは夫人やその子に対する実家の影響力が次第に低下していたことを物語る。

また、婚姻によって構築された二国間関係はそれをとりまく国際情勢に左右されやすいものであり、特に晋が覇権を握った後は、魯・斉の二国間関係のみが自国の安全を保障しなくなっている。さらに、斉の君主交代によっても変化するものであった。このように婚姻は二国間

関係の長期的な安定を保証しうるものとは言えず、次第に婚姻関係よりも現実的な力関係の方が両国の対外政策に対してより強い影響を及ぼしていくことになる。[77] このような状況に加え、実際には異姓の夫人が生んだ人物が公位につく例があった。にもかかわらず、魯・斉の間で連続的な婚姻が結ばれる背景には、婚姻によって斉という外援を得ることで国内外の安定を図ろうとする魯の意図が見られ、これにより斉は婚姻が続く間、魯の公位継承や対外政策に一定の影響を及ぼすことが可能であった。

さらに魯侯夫人の活動を見ていくと、最も精力的に活動している文姜はむしろ魯・斉外交の中では斉の意向に沿って終始活動しているが、魯におけるその政治的地位・役割は僖公期以降に見られる公子・世族に近いものであった。[78] これに対して、哀姜や穆姜は斉の意向に反して、あるいは関わりなく魯の勢力争いに関与している。つまり、一般に考えられるような実家や嫁ぎ先の意向に沿って動くだけではなく、『左伝』を見る限り自発的な行動を取るケースも見られるようになる。夫人に対する実家の影響力が弱まっていくことは、彼女たちを実家の意向に従うだけでも、『左伝』が指摘するような夫に従うだけでもなく、自らの意思によって行動できる存在へと変化させていったと言えよう。一方で、夫人に対する実家の影響力の低下は婚姻の意義の希薄化や夫人の政治力の低下も徐々にもたらしていくようになる。文姜以外の夫人に目立った外交活動が見られないことはこうした要因が挙げられる。哀姜・出姜に関しては、その末路に尚も実家の影響力の強さを見ることができるが、穆姜の行動・末路には斉の関与が全く感じられなくなり、さらに魯において公室を中心とした政治体制から世族を中心とした政治体制に移行するにつれ、公室の一員たる夫人の役割も低下したと考えられる。最後の斉姜に至っては婚姻と卒・葬記事のみであり、彼女の人物像を知ることはできない。ここに魯・斉間における婚姻の役割は終焉を迎えたと言えるのである。

最後に、魯侯夫人の政治的意義について、魯国史の中で位置づけておきたい。松井嘉徳氏は、鄭の七穆の検討を通して、世族政治の歴史的意義を公位継承抗争に集約される個別的・非連続的権力構造を克服するものであったと指摘している。[79] すなわち、世族による支配体制の出現は、君主交代等によって生じる政治的な不安定さを特定家系の継続的権力掌握によって解消することを目的としたものであった。こうした指摘に基づけば、魯の公位

継承に直接影響力を及ぼしうる斉との婚姻や夫人たちの政治的活動は、魯の政権を絶えず不安定にする危険性をはらむものであったと言えよう。前稿で指摘したように、三桓氏の権力掌握は成公期から襄公期にかけて確立し、襄公期における魯の対外政策は従来の不安定なものとは異なり、一貫したものへと変わっている[80]。成公期を最後に、斉との婚姻や夫人の政治的動向が史料から見られなくなることは、松井氏の指摘と対応するものと言えよう。政権の恒常性が待望される流れの中で、活動的な夫人はむしろ克服されるべき存在であったのである。

**註**

（1）春秋期の魯を通史的に扱ったものとして、郭克煜等『魯国史』（人民出版社、一九九四年、北京）、同様に斉については、王閣森・唐致卿主編『斉国史』（山東人民出版社、一九九二年、済南）がある。この他、中国の魯国史研究については周新芳「近年来魯国史研究概観」（『山東師大学報（社会科学版）』一九九九年第二期）、春秋時代の魯・斉関係については田軍「春秋時期斉魯関係述論」（『山東教育学院学報』二〇〇七年第一期）を挙げておく。

（2）宇都木章「『春秋』にみえる魯の公女（一）」（『中国古代史研究第六』研文出版、一九八九年）、齋藤道子「春秋時代の婚姻―その時代的特質を求めて―」（『東海大学文明研究所紀要』第一二号、一九九二年）、小林伸二「春秋時代の婚姻と外交」（『大正大学研究紀要』人間学部・文学部九一号、二〇〇六年）など。この他に、小寺敦氏が『春秋』三伝の婚姻記事を分析して、『左伝』編者の婚姻に対する評価から成書年代及びその背景を論じている（小寺敦『先秦家族関係史料の新研究』汲古書院、二〇〇八年）。

（3）齋藤前掲註（2）論文八五頁。

（4）小林前掲註（2）論文一〇一頁。

（5）吉本道雅「先秦王侯系譜考」『立命館文学』第五五六号、二〇〇〇年、二〇―二四頁。

（6）文姜を扱ったものに、鈴木裕子「『左伝』に見る斉魯の婚姻―文姜と斉姜―」（『青山語文』第二八号、一九九八年）、尾崎保子「左伝における婦女観(13)―魯桓文姜の輪郭―」（『学苑』第七七三号、二〇〇五年）、小林前掲註（2）論文がある。

（7）工藤元男氏は睡虎地秦簡の属邦律の検討から子の身分は母の出自に帰するとする（工藤元男『睡虎地秦簡よりみた秦代の国家と社会』創文社、一九九八年）。この他の研究史については小寺敦「先秦時代婚姻史および隣接諸分野研究の展望」（『中国史学』第一〇巻、二〇〇〇年、のち小寺前掲（2）著書に再録）参照。

（8）『東海史学』第四〇号、二〇〇六年。

（9）「公室」の定義については、前稿同様、宇都木氏の指摘を踏襲し、公・公の夫人・公子・公孫までを指すこととする。

(10) 襄公（荘八）・公孫無知（荘九）・公子無虧（僖一八）・舎（文一四）・懿公（文一八）・荼（哀六）・悼公（哀一〇）・簡公（哀一四）。一方、魯では隠公（隠一一）・桓公（桓一八）・公子般（荘三二）・閔公（閔二）の四例である（但し、桓公は斉において殺害されている）。春秋時代の君主殺害については水野卓「春秋時代の君主―君主の殺害・出奔・捕虜の検討から―」（『史学』第七一巻第二・三号、二〇〇二年）参照。

(11) 齋藤前掲註(2)論文八六―八八頁。

(12) 吉田前稿二〇頁。

(13) また、隠公二年には桓公の母仲子が、翌隠公三年には隠公の母声子が相次いで死去しており、こうしたことも魯・宋関係に影響を及ぼした可能性があろう。

(14) この時期の斉については吉本道雅「春秋斉覇考」（『史林』第七三巻第二号、一九九〇年）参照。後に『中国先秦史の研究』（京都大学学術出版会、二〇〇五年）に再録。

(15) 『左伝』桓公元年に「春、公位に即き、好みを鄭に修む」とあり、魯は桓公の時代にも引き続き鄭と友好関係を結んでいる。

(16) 宇都木章「魯の三桓氏の成立について（一）」（『中国古代史研究第四』雄山閣出版、一九七六年）二三五頁及び吉田前稿二〇頁。

(17) 小寺氏はこうした「非礼」記事から『左伝』編者の意図を読み取ろうと試みている（小寺敦「婚姻記事の差異よりみた春秋三伝―『春秋』経文に見える事例を中心として―」『史料批判研究』創刊号、一九九八年）。

(18) 『左伝』文公元年、昭公二六年。

(19) 吉本前掲註(14)論文九九頁。

(20) 宇都木前掲註(2)論文八一頁。

(21) 魯と紀の婚姻については宇都木前掲註(2)論文参照。

(22) 鈴木前掲註(6)論文、尾崎前掲註(6)論文、小林前掲註(2)論文。

(23) 〔表4〕参照。

(24) 宇都木前掲註(16)論文二三五頁。

(25) 鈴木前掲註(6)論文、小林前掲註(2)論文。

(26) 夫人が実家の意向で外交活動を行った例は「鄫の季姫来寧す。〔僖〕公怒りて之を止む。鄫子の朝せざるを以てなり。夏、防に遇ひて、来朝せしむ。」（僖公一四年）がある。

(27) 鈴木前掲註(6)論文一一三―一一七頁。

(28) 荘公の死後においても、斉女叔姜が生んだ公子（後の閔公）ではなく、孟任の生んだ公子般が後継者に目されている。

(29) 『左伝』は荘公一五年の鄄の会をもって「斉始めて覇たるなり」としている。

(30) 『左伝』は斉桓公の後ろ盾として母方の実家である衛と莒を挙げている（昭公一三年）。

(31) 宇都木章「斉の桓公の即位と莒国」（『山本博士還暦記念　東洋史論叢』山川出版社、一九七二年）。

(32) 花房卓爾氏は春秋時代の出奔について検討し、血縁関係の社会的機能はなお根強く働きつづけていた反面、それは次第に弛緩していく傾向にあり、かわって政治的な

関係が人間と人間を結んではなさない絆として機能しはじめる、と指摘する（花房卓爾「春秋時代の亡命―亡命に及ぼす通婚・姻戚関係の影響―」『広島大学文学部紀要』第四一巻、一九八一年、四〇頁）。

(33) 魯侯夫人の動向については〔表4〕参照。

(34) 鈴木前掲註(6)論文一一六―一一七頁。

(35) 小林前掲註(2)論文一〇六―一〇七頁。

(36) 離反した宋を伐つ際には、「春、諸侯、宋を伐つ。斉人、師を周に請ふ。夏、単伯之に会し、成ぎを宋に取りて還る」（荘公一四年）と王命をも求めて宋を従わせている。

(37) 「初め〔荘〕公台を築きて党氏に臨む。孟任を見て之に従はんとす。閟づ。而して夫人の言を以てす。之に許す。臂を割きて〔荘〕公に盟ふ。子般を生む」（荘公三二年）

(38) 荘公三二年経文の会箋はこの時点で孟任は死んでいたと推測する。

(39) 「秋、桓宮の楹を丹にす」（荘公三三年）、「春、其の桷に刻むは、皆礼に非ざるなり」「秋、哀姜至る。〔荘〕公、宗婦をして覿ゆるに幣を用ひしむるは、礼に非ざるなり」（ともに荘公二四年）

(40) 吉本氏は斉襄公の政策は僖公のそれを踏襲するものであったと指摘している（前掲註(14)論文八七―八八頁）。

(41) 齋藤前掲註(2)論文八六頁。

(42) 宇都木前掲註(16)論文二三五―二三六頁、吉田前稿二〇―二一頁。

(43) 吉田前稿二二頁。

(44) 荘公以外では、「臧孫辰、糴を斉に告ぐ」（荘公二八年経文）、「公子慶父、斉に如く」（荘公三二年経文）の二例が見られる。但し、後者については荘公死後のことである。

(45) 鈴木前掲註(6)論文一一九頁。

(46) 鈴木前掲註(6)論文一一九―一二〇頁。

(47) 但し、当然公子慶父は哀姜を通して斉の後ろ盾を期待していたと考えられる。

(48) 宇都木前掲註(16)論文二二六頁。また、同年冬に魯に訪れた斉の仲孫湫は「慶父を去らずんば、魯の難未だ已まじ」と述べている。

(49) 『左伝』閔公二年。

(50) 宇都木前掲註(16)論文二三一頁。

(51) 僖公二八年経文に「師、斉を救う」とある。尚、宋襄公は斉孝公を支援しているが、孝公の母は鄭姫という鄭の女性である。斉桓公の公子には宋華子の生んだ公子雍がいるが、宋はこれを支援した様子はない。こうした事例も公位継承における介入が血縁関係のみによらないことを示している。

(52) こうした公子が君主の補佐役として政治の中心に出てくる要因の一つとして、荘公・僖公期の間に見られる父子継承の一般化があったと考えられる（吉田前稿二四頁）。

(53) 宇都木前掲註(16)論文二三一―二三二頁。

(54) 吉田前稿二二―二三頁。

(55) 宇都木前掲註(16)論文二三二頁、吉田前稿二三―二四

頁。

(56) 文公期に斉が参加した晋の主宰する会盟は文公七年の扈の盟のみである。

(57) 文公一三年には衛・鄭が魯に晋へのとりなしを要請しており、晋の同盟国の中で一定の地位を認められていたと言えよう。

(58) この他、文公九年に楚の使者が魯に訪れており、楚の脅威にも対応する必要があった。

(59) 「春、季孫行父、斉侯（懿公）に陽穀に会す。斉侯、盟に及ばず」、「六月戊辰、公子遂、斉侯（懿公）と鄑丘に盟ふ」（ともに文公一六年経文）、「六月癸未、〔文〕公、斉侯（懿公）と穀に盟ふ」（文公一七年経文）

(60) 「夏、四月癸亥、声姜を葬る。斉の難有り。是を以て緩れたり」（文公一七年）。

(61) 『左伝』文公一八年。

(62) 「春、〔宣〕公、斉に如く。高固、斉侯（恵公）をして〔宣〕公を止めしめ、叔姫を請ふ」（宣公五年）、「夏、〔宣〕公、斉侯（恵公）に会して莱を伐つとは、与に謀らざるなり」（宣公七年）。

(63) 楚荘王の中原進出については安倍（齋藤）道子「荘王期における楚の対外発展―この時期の王権強化の動きとの関連に注目しながら―」（『東海大学紀要文学部』第三六輯、一九八一年）参照。

(64) 魯が晋文公・襄公の死を契機として、晋から距離を置こうとしているように、当時においては魯・晋関係も同様である。

(65) 宇都木章「魯の三桓氏の成立について（二）」（『中国古代史研究第五』雄山閣出版、一九八二年）九〇―九二頁。

(66) 『左伝』成公四年及び成公八年。

(67) 『左伝』襄公一九年。

(68) 吉田前稿二七頁。

(69) 『左伝』成公一六年。

(70) 三桓氏は始祖である公子友以来、季孫氏が一貫して他の二氏に対して優位にあり、仲孫氏・叔孫氏に対して外交方針の決定や後継問題などにおいて強い影響力を持っていた。

(71) 尾崎保子「左伝における婦女観⑯―魯宣穆姜の錯誤―」（『学苑』第七八五号、二〇〇六年）四〇―四一頁。

(72) 尾崎氏は穆姜の失敗について、文姜の場合と比較して彼女の後ろ盾のなさを強調している（尾崎前掲註(71)論文四八―四九頁）。

(73) 吉田前稿三〇頁。

(74) 宇都木氏は魯の公女婚姻記事が成公一〇年で途絶えることを特筆すべきことと指摘している（宇都木前掲註(2)論文七六頁）。またこれに対して、齋藤氏は公女の婚姻が従来の記録すべきものとしての性質を失っていったのではないかとする見解を述べている（齋藤前掲註(2)論文八九頁注七）。

(75) 但し、『左伝』哀公二四年には、哀公が公子荊の母を夫人としたことにより、公子荊は太子として立てられており、公位継承において夫人の地位が尊重されている。

また、昭公は同姓であるにもかかわらず呉から夫人を迎えたとされる例（哀公一二年）には注意が必要である。

(76) 但し、小林氏は媵器の検討を通して、婚姻が二国間のみではなく、媵を送る第三国も包括した関係性を生じさせるものであったと指摘している（小林伸二「婚姻をめぐる絆―春秋時代の国際社会―」『大正大学研究論叢』第一三号、二〇〇七年、一〇七頁）。

(77) この点に関して、宇都木氏が紀の問題に関して、魯が婚姻関係により紀を援助したのではなく、魯の対外政策により魯と紀の婚姻が行われたと指摘している点が注目に値する（宇都木前掲註(2)論文八五頁）。

(78) その意味では、中国古代において女性の地位は比較的高かったとする近年の研究成果に沿うものと言えよう。但し、このような夫人の地位は正夫人であること、さらには出自の良さを考慮しなければなるまい。『左伝』の記述において、哀姜や穆姜に対しては公子慶父・叔孫僑如の方から接近してきたのに対して、成風や敬嬴は自分たちから公子友・公子遂に接近していることは示唆的であろう。

(79) 松井嘉徳「鄭の七穆―春秋世族論の一環として―」（『古代文化』第四四巻第一号、一九九二年）一一―一二頁。

(80) 吉田前稿三一―三二頁。